

## 誠実に向き合えば、おのずと結果はついてくる。

世の中には、「人類共通の言語」と例えられるものがある。スポーツや音楽はその代表格だが、「サイエンス」もまた国や言語といった壁を超え、ボーダレスに好影響を与え合う手段の一つ。今この瞬間も世界中で、あらゆる分野の研究者が人類共通の未解決問題に挑んでいる。花田篤志さん(40)も同じ道を大学時代に歩み始めた一人だった。

「バイオサイエンスの世界に惹かれ、大学時代は植物ホルモンの研究に没頭しました。その権威である教授に指導を受けたことが、研究の面白さに目覚めた理由です」

花田さんは、帝京大学理工学部バイオサイエンス学科で研究者としての礎を築いた。そして卒業と同時に、独立行政法人理化学研究所の植物科学研究センターへ。テクニカルスタッフとしてキャリアを積み、2008年には世界初の偉業に携わる。それは、植物の生存競争の原点となる「枝分かれ」を制御する新たなホルモンの発見。農作物の生産量管理や品質向上、農耕地被害の低減などへの効果が期待された。

「研究チームの一員として私が担ったのは、いわば発見したことを証明する「分析手法」の確立です。実は大学時代にも取り組んでいた領域で、当時からやりがいを感じていました。自分の培ってきた技術が世の中で評価されたことは、大きな自信になりました」

この成果は論文にまとめられ、現在も世界中で引用されている。ちなみに花田さんは、トムソン・ロイター社が発表した2014・2015・20

16年度の「Highly Cited Researchers(高被引用論文著者)」に選ばれた一人。被引用数が上位1%の論文を発表した世界中の研究者から3000人ほどが選出されるが、そのうち日本の研究者は80人に過ぎない。研究者として脚光を浴びた花田さんだが、意外にも偉業の翌年には転身を遂げる。研究を「支援する側」に立ったのだ。

現在は、分析装置の開発から販売までを手掛けるグローバル企業SCIE X(サイエックス)社に勤務。クライアントは大学・研究機関、製薬メーカー、食品会社や受託検査機関など幅広い。

「サイエックスにおけるイノベーションを加速させるには、世界中で行われている研究活動そのものをバックアップすることも重要。そう考えるようになったのです」

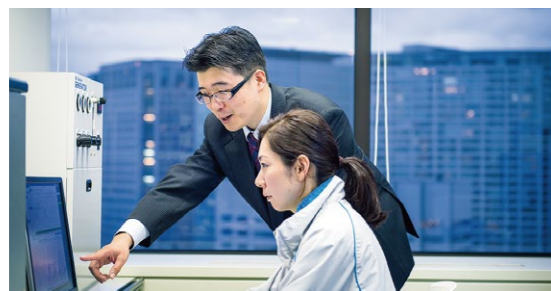
社内での役割は、クライアントと製品を結び、懸け橋。業務内容は分析装置のコーディネート、プランニング、ソリューションと多岐にわたる。米国にある本社に向き、日本の顧客ニーズをフィードバックすることにも積極的だ。そんな花田さんには信念がある。「誠実に向き合えば、おのずと結果はついてくる」。大学時代から変わることのないISM(イズム)である。

「分析結果は「証拠」として残り、後世まで独り歩きしていくものです。誠実さなくして、人類に貢献し幸せを生み出すことはできません」

日本に軸足を置きながら国際的な舞台に立ち、貢献できるなら職域にもこだわらない。まさしくボーダレスな生き方ではないだろうか。

信念が、世の中を変えていく。

iSM × ボーダレス



分析に使用されるユニットのデモンストレーションや商談が行われるショールームでのワンシーン。クライアントの用途や要望に応える提案を行うため、協働するスタッフと意見交換を繰り返す。



花田さんが担う役割や業務内容は幅広い。それを象徴するのが服装で、製品を使った分析で試薬を行う際は白衣を羽織り、営業担当に同行してクライアントに提案を行う際にはスーツを纏う。

